

根疾
治病

觀音耳根圓通法

井出靜海述

大日本豫言學館藏版



019400-000-6

特10-632

觀音耳根圓通法

井出 靜海/著

M41.12

ABG-0101





觀者大意大然中三年



三身曰心曰念變出

由天性佛從圓通

出入圓通

自是之人



疾病根 觀音耳根圓通法

井出靜海述

緒論

禪と武士道

一言にして之を云はんか、花は櫻木人は武士で、この武士道こそ、正是我大和民族の精華である、世界に獨特の美点である、この精華、この美点、是れ我國をして、開國二千五百有餘年來、未だ嘗て外國の侮りを受けしめざりし所以である、世界列強の畏怖屏息、能く仰ぎ觀るなきの強露を懲せし所以である、故にこの武士道養成の如きは、今や旭日昇天の勢力ある我大和民族の決して忽諸に附すべからざるの一事である、

然り而してこの武士道なるものは、由來我大和民族の先天的特有なるや勿論

なりと雖も、而かも其の精華をして、倍々秩序的に、又倍々公共的に、所謂錦上華を添ゆる底の美觀を呈せしめし所以のものは、確かに佛教……就中禪の力によるや今更歎々の要を見ない、乍併、たゞ夫これだけに止め置かんか、亦何となく話つて悉さるるの感じがするので、ナト其梗概をも説明しよう、

却説和語のもののふとは、語義物行に出たので、ものは物の具の物にて、凡て刀槍弓矢其他一切の軍器に關する總稱なり、又なふは行なふ、諾なふのなふも等しく親しく軍器を掌るの謂である、尙この軍器を掌り兵を遣り戰を挑むものは是即ち武人なるを以て茲に武士を和語にても、ふとは云ふのである、而して其起源たるや遠く神代の太古にありと雖も、事繁に渉るを以て暫時之を後日に譲り、たゞ夫れ其史を見えし所よりするも、實に皇祖神武帝の朝、物部、衆部の二部を置かれしが如きは普く世間の知る所……併し當時にあつては、勿論特々武士道と云ひる名詞が、赫然上下の間にあつた譯でもなんでもあいのであるが、兎も角武士道の實體其ものに至つては、優々嚴存して居つたと云ふ

ことは、固より疑を容るべき事ではあ……ト此様云ふて來ると其實体如何……之れ讀者の必ず聞かんと欲する所なるべきを以て、復聊か之が説明しようものならば、先づ忠孝廉恥、の爲に生死を度外視する處の實踐道德即ち之である……とでも云ふたらばマア大体任つて居るだらう……併し之が細説などに至つては、不學不文の吾輩よりは、最早其大要を、遺憾なく道破し盡したものがあつる請ふ左に一寸と之を拜借しよう……却説大伴家持は

大伴の遠つ神れやの 其名をば大來目主と

負ひもちて仕へしまつる 海ゆかば水づく屍

山往かば草生す屍 天皇の邊にふそ死なめ

願みはせじと言だに 丈夫の清き其名を

考へよ今のをつくに 流さへる祖の兒ごもぞ

大伴の佐伯の氏は 人の祖の立つることだに

人の子は祖の名立たず 天皇にまつるふものと

言ひ縫げるふどのつかさぞ 梓弓手にとりもちて

劔太刀腰にとりはき 朝まもり夕のまもりに

天皇の御門の護り われを置きて又人はあらじと

いや立て、思ひしまさる 天皇の御言のさきぞ

聞けばたふとみ

と歌ひ、管領斯波義將は

凡弓箭取と云ふ者は我身の事は更なり、子孫永劫の事を思ふて振舞ふべきなり、限りある命を惜みて、永代浮名をとるべからず、一天の君の御爲め、又は弓箭の御大事に立ちて、身命を棄つるを本意とすべし

と誨ひ、又大久保彦左衛門は
電光石火朝露の如くある夢の世に、何と渡世を送ればとて名には代へべきか、人は一代名は未代あり、子供ごもよく聞け
と喝破した……

之を要するも、武士道あるものは、決して生死に執着せざるものである、サア！其生死……却て容易の問題ではない、然るに之を如露如電と觀じなして、大山前に崩るゝも、百川後に決するも、寂然不動、死を觀るふと恰も歸するが如く、以て其眞面目を遺憾なく發揮し得せしむるものは、亦之れ禪の力である、……としたならば、そも眞禪……孰か之を要なしと云ふ……請ふ章を換へて之を説く事にしよう

禪とは何ぞや

禪とは元來梵語の禪那と云ふ字から來たので、禪那の字義は、靜慮即ち靜よ考慮の意義である、之は夫の六波羅密中の一の禪定の事であるが、禪宗の所謂禪那なるものは、之は全く別物にて、即ち法界を究め佛法を攝め盡した禪那だと云ふ事だが併し左様な面倒になると、素より門外漢の吾輩などが、到底得て説くべきの事ではない、……故に左様な面倒臭い問題は擧げて之を専門家に譲

ると云ふ事とするが、ろも此の禪那、之が何様して坐禪と云ふ字に變つて來たかど云ふことを一言すれば、大抵禪那即ち靜慮を實行する時には坐り込むで始めるので、其處で其座すと云ふ字義の坐の字と、梵字の頭とを兩方用えて茲に坐禪とは唱へたので、所謂梵漢兼舉けんきよの字、實は翻譯上の一大失策だと云ふ事だ……餘事はさてをき、ろも此の坐禪なるものが、何故に而かく必要なるかと云ふに、こは是れ云ふ迄もあく、人は百種の煩惱に、眞如の本心と云ふものを、遮蔽せられて居るからして、之を掃ひ、之を除くには、尙幾多の方法手段もあるべきなれども、而かも坐禪即ち靜慮は、其最捷徑なればによりてある、約して之を云はんか、坐禪は大悟の捷徑である……到彼岸の大乗である……

禪と疾病

諺に『悟りの悟り臭きは眞の悟りならず』と云ふが如く、仮令ば生死透脱だとか、無心無想だとか、三關を通つたとか、煩惱を掃つて正覺を得たとか、

云ふ考へを全く絶つて、直ちに、福智圓滿、相好具足、の佛と同心同体たる、即ち大悟徹底と云ふ事になると、たゞ夫精神上に何の疾しき處も無いと云ふのみでなくして、實に此の肉体上の疾病と云ふもの迄が、共に根絶する事になるのである、

西洋の某醫學大家言へるあり曰く『精神は過勞なければ、肉体は疾病なし』と旨あるかな言やである、何とすれば、人間凡百の疾病あるものが、素より精神作用によりて、發生し來るものにはあらずと雖も、而かも其精神作用によりては、或は之を重患たらしめ、或は之を輕快ならしむるが如きは、普く世の實驗確証の所なればに因てある、果して然らば、此の禪と云ふものは、平時は於ては克く國民を無疾健全ならしめ、戰時に於ては、又其武士道を發輝せしむるの要素たれば、平素之が修養の如何に必要なかの如きは、最早言を俟ざるの問題である、

夫斯の如く禪の人生上は必要欠くべからざるにも不拘……世に禪僧なるも

の、あるあつて、累代化導に従事しつゝあるにも不拘、今尙禪の普及を見ざるが如きは、素より種々なる原因の別に存するあるべきも、而かも所依的經典の洪濤に過ぎ、以て讀破の困難なると、漫に坐禪と云ふのみにて容易に會得し難きとの如きは、亦之れ一大原因たらずんばあらしである、然るに釋迦牟尼佛以來……………迦葉尊者以來……………名僧智識の輩出にも不拘、此處に心の着くものなく、禪は佛心宗なり、教外別傳不立文字なりなど、一に自得を俟ち以て主眼の化導が更に及ばざるを見、却つて之を高しとしたりしが如きは、嗚呼これ何たる痛恨事なりしぞや……………此際此秋、天は一人の尊者を下し如上千有餘年來の弊害を打破し、以て救世安民の實をば擧げ様とせらるゝ事になつた、一人とは誰れ……………耳根圓通法の發見者恩師原田玄龍師即ち之である、

原田玄龍師の識見

師一日人に語つて曰く、宗教の眞面目たる、たゞ夫れ大悟徹底にあるのであ

るが、其到彼岸的道途に至つては、各自智識の淺深によりて、必ずしも其一途に出る事が出来ん、之れ僞佛耶の三教を始めとして世に幾多宗教の因で生ずる所以たらずんばあらしである、然りと雖も眞理は最後の勝利者なり、嗚呼勝利者……………誰か其月桂冠を頂くものぞ……………予や素不敏なりと雖も、佛縁あつて緇門に入りぬ、豈なす事無くして止むべけんやと、爾來兀々として倦まず、漸くよして此の耳根圓通法をば發見したのである、抑も此の耳根圓通の方法たる、別々難行苦行の要もなく、僅々數十の日子を不出して而かもよく大悟徹底の到彼岸を得るの方法たれば、正是斯界到達の最捷徑にして、尙且鉄軌の敷設あるが如きものである、故に將來……………特に近き將來に於ては、世界幾多の宗教が、自然消滅の態度を現はし、以て此の圓通法を皈したるが如きは、決して架空の妄想ではあゝい、果して斯る曉には、予や第二の釋迦である、故に予の一旦入寂の日も會せんか、別に葬送の營みは要らぬ、何となれば早晚之れを世界葬として以て改め葬るの日あれば因てある……………と言を少しく豪放に過るの觀

あるも、斯の見識………斯の豪邁………是の一大發見をなさしめしの要素である、否其實にして却つて其語も過るあつて存せむか、孰か之を豪語と言はん、否乎………

予の參禪

予や先年微恙の爲め、臥床あるや、偶々先覺圓照内海師の來訪に會ふた、予や病の所以を以て其の欠禮を謝せしに、師阿々大笑して曰く、宇宙の間動物敢て少きよあらずと雖も、而も其の醫藥的他力によりて偏に之が治癒を期するが如きは、自ら萬物の靈長と申す、吾人々類の外はない、是實に其誇るべき点なるが如く然りと雖も、翻つて亦考一考に及ぶときは、慚汗淋漓背に浴きを覺えずんばあらずである、何となれば、其自ら之が治癒をさす能はざるに坐すればに因てゝある………と之より老師が發見の觀音耳根圓通法よるときは、終身無病息恙ありとて、諄々説く事數時間、其説頗る簡なるも、其理や萬世不易

なり、予や素指を禪味に染むるもの、豁然悟る處あり、即時實脩に着手せしに、未だ數日ならずして、直ちに透脱の彼岸に達しぬ、爾來拾數星霜の間絶て煩悶疾痛を知らず、其益果して幾何ぞや、是予が此處に此復講を敢てするの所以である、

本論

是より愈々本論に入る事にするが、そも此の觀音耳根圓通の法たる、實に師の實驗確証を處よして、容易に菩提を發顯し得る事が出来る者である、併し事の饒綜を思ふべから、先づ之を師の講話通り左記三段に分ちて大体之が説明を試みる事にする

- (一) 實驗確証の始末
- (二) 本心の實体と陀那の反流
- (三) 耳根定力

(一) 實驗確証の始末

抑も行住堅臥珍重措くなしと雖も、容易に知れ難きは本心の實體である、故
 ん古賢先聖紅と説き、白と説き、無と説くのみ絶て其確乎不拔の本義を述るも
 のがない、獨り大覺調御あり、實脩を了して本心の實體を覺り以て佛教を印度
 に布く、然るゝ十二代馬鳴菩薩の時に至つて一旦其具を失ふの不幸には會ふた
 が、師の確實なる三昧によりて、漸く之が恢復をなし、爾后震旦を経て我日本
 には來れり、然るに年月の久しき、遂に名義を存するのみ、茫々漠々、孰か其
 の本義を知らん……である、若夫斯の如くにして、心王の所依、無明の本原、
 解脱の方法、等逐一之が確証を得ずんば、所謂真正の佛教も終に空談妄説の誹
 りを受け、如來出世の本願も空く水泡には飯し了らんかなである、師や深く之
 を思ひ、幾多有名の智識を參し、只管坐禪公案に餘念なかりしも毎に心に満た
 ざるものあり、然るに原坦山師は頗る博學にして且確説を主張すると聞き、直
 ちに之に參禪を求められた、是實に慶應三年九月の事なりしと云、却説師の所

説たる全く他の智識と異あり皆實驗正確に出るを以て、日夕得る處多く爲に一
 大勇猛心を鼓舞し、茲に倍々修行を累ね、而して明治二年六月七日に至るや、
 師、首楞嚴經を講せらるゝに會す、其觀音耳根圓通の卷「初於聞中入流亡所
 入既寂動靜二相了然不生」の句も及び、深く心念も感せしより、即時從前の工
 夫を放下し、一に定力を耳根に用ゆる一月餘、其初めは堅確にして容易に定力
 の及び難かりしも、漸やくにして耳根に定力の入るを感ずると同時も、又容易
 に腦髓に圓通し前腦より後腦に陀那(楞嚴經に陀那微細の識)の流中を反へし
 腦中宛然空界の如く、一塵一翳をだも留むるあきよ至りしかば、歡天喜地、踊
 躍睡らざる事七晝夜餘なりしと云ふ……斯くて又定力を胸腹に用えしに、日
 ならずして悉く解脱し得る事もあつたので、爾來四十年の久しき尙之を實驗す
 るに、身体益々壯且健、特に幾多の逆境界に遭遇するも、毫も退轉の念を生ぜ
 ず、常に大安樂の地に住するを得たりと、左もありぬべき事である、觀音經に
 曰く「於怖畏急難之中能施無畏」と即ち之れ……

尙此の耳根より腦髓に定力を用ゆる事久しきに涉るときは、遂に頭耳に動搖を顯はすを以て、之を外形上より見るも又幾分の信を置く事が出来るのである、

(二) 本心の實體と陀那の反流

腦髓は神系中樞の存する處にして、胸腹は又其支配を受くる支末部に屬して居る、而して心王の居城は云ふ迄もなく即ち腦髓の中樞である、然るも古來智識の或は胸腹空淨を説くものもあるも、未だ曾て説の腦髓に及ぶ者はなかつたのである、然るに師は原師の講義に感じ且實驗確証の上よりして、而かも心王の居城は即ち腦髓の中樞なることを確認し得られたさうである、此他涅槃教にも『頭爲殿堂心王居中』とあるものを師の外更に發見し得ざりしと云ふものは正是宿縁の然らしめしものなりと云ふより外はないのであらう……

而して又、觀音流を入すとは右耳根に定力を用ゆるときは前腦より後腦に陀那の流注を反入するを云ふのである、今試に楞嚴經を擧げんか、

觀世音菩薩即從座起頂禮佛足而白佛言世尊憶念我昔無數恒河沙却於時有佛出

現於世名觀世音我於彼佛發菩提心彼佛教我從聞思修入三摩地初於聞中入流亡所所入既寂動靜二相了然不生

佛告阿難諸修行人不能得成無上菩提皆由不知二種根本錯亂修習

聞非自然生因聲有名字旋聞與聲脫能脫欲誰名一根既返源六根成解脫見聞如幼

翳

阿難白佛言世尊云何逆流深入三門能令六根一時清淨

佛問圓通我從耳門圓照三昧緣心自在因入流相得三摩提成就菩提斯爲第一

由我所得圓通本根發妙耳門然後身心微妙含容周徧法界

若能於此悟圓通根逆彼無始識妄業流得循圓通與不圓通日却相倍

佛問圓通我以法音降伏魔怨銷滅諸漏斯爲第一

即ち斯の通りである、看よ聞中入流と云ひ二種根本と云ひ旋聞返源と云ひ逆

流と云ひ耳門圓照三昧と云ひ妙耳門と云ひ、逆業流と云ひ、銷滅諸漏と云ひ、

何も師が主張の、耳根に定力を用ゆるときは陀那の流注を返入し得る事を説き

しには外からぬのである。

抑も此耳門たる凡て定力を用ゆるには頗る肝要の門戸なるを以て、最初より各此耳根に定力を用ひ以て流相の反入を得るに至らんか、所謂身心一如の妙境又は達し得るのである、然り而して右に所謂流相とは他なし、夫の陀那識なるものにして、之を執持識とも不可覺智堅住器識とも又不覺不知器世間識とも云ふものにして、源を腰骨盤より發し昇流して脊髓に至り尙進んでは腦に入り茲は腦氣と和合して、再度胸腹四肢等に下り以て全身を周流するものである、然りと雖も性滯滞し易きものなるを以て、腦にあつては無明となり、胸腹にありては煩惱となり以て本心の實體と云ふものを遮蔽し易きや毎である、今語を替て之を言はんか、無明も煩惱も、共に之陀那の變質せしものにして、楞嚴經の所謂無始生死の根本と、無始菩提涅槃元清淨の體とか一時和合になるものにして、恰も豆汁が鹹汁と和合して忽ち豆腐とあるが如きものである、然り而して又此の無明煩惱と云ふものは、愛惡喜怒哀憎怨愁嘆、苦惱畏怖瞋恚嫉妬、等の念

慮及び凡百の疾病などを、共に誘發するものである、是を以て此流注反入の如きは至緊よりもより一層尙且至緊なるものなりと云はねばならむものなりである、故に此流注反入の如きは、而かも大乘の骨髓にして、釋迦牟尼佛が二十五菩薩の爲に、楞嚴會上に演說せられし二十五圓通の眼目である、然るに惜哉斯るの實確証の法は何時しか雲烟模糊の間に埋没し去られて遂に廣遠空漠の妄說のみが傳來し爲に茫然自失の境界に空しく泛々たりしが如きは、嗚呼之れ何たる恨事ぞや、之師が一大勇猛心を奮起して、茲に此の流注反入を實驗確証せられたるの所以である、讀者諸君………大安樂の地は近けり、奮て人後に落る勿れである、

(三) 耳根の定力

今試に心性顯發の順路と云ふものを説んか、仮令は金碧莊嚴の王城に登らんには必ずや九重の門によらざるべからざるが如く、吾心王城に登らんにも又同じく六根の門頭と云ふものがあるのである、六根とは即ち眼、耳、鼻、舌、身、

意、の六にして識又之に住して居る、之を名けて六識と云ふ、然るに又一方六塵と稱するものもありて毎に六根六識を遮蔽し、以て細大無量の無明と煩惱とをば起し來るものである、此の無明、此の煩惱、而かも偉大なる執着力を有するを以て、之を打ち之を破りて、其心源に達するが如きは事極めて難事に屬すると雖も、一旦此れに到達せんか、之を稱して自覺性智と云ひ、又眞如法性と云ひ、尙又心王宮殿には至るとも云ふのである、若夫斯くて心王宮殿に至らんか、七珍萬寶兼ね備はるを以て、茲に始めて煩惱菩提實に昨夢の如く眞に天空海濶にはなるのである、夫然り果して然らば、其何によりてか六塵を拂はん、他なし六根門上に定力を用ゆるにあるのみ、楞嚴經に曰く『迷晦即無明發明便解脱解給因次第六解一亦亡』と即ち之を云ふのである、而して吾人同門の士に至つては何れも皆師説に推服し、各自定力を耳根に用えし結果として共に心性の顯發を見しものあれば、齊しく又此耳根よられん事を勸誘する、斯くて耳根と定力の入るを覺へんか、順次之を胸腹も及ぼし行くのである、何となれ

ば耳根の定力仮令全腦には及ぶと雖も、腦と胸腹共に無明と煩惱との宿る處たれば、各自定力を用ゆるよあらずんば、容易に其圓滿を期し難ければに因てある、試に看よ、腦髓は原府として、胸腹と四肢とは共に之れ支なり末なりである、故に此の支末に至る迄逐次定力を用ゆるが如きは、正は是合利的の順序にあらずや、且此の陀那の原泉たる、混々として腰骨盤より上昇し腦氣と和合(起信論に覺と不覺と和合し一に非ず異ふ非ず此を阿羅耶識と名くと云ふの即これ)し以て胸腹四肢に下るもの、如し、故に耳根と定力を用ゆるときは、腦髓にて陀那の和合を遮るを以て胸腹に流注する事至つて少く隨て胸腹に定力を用ゆるに於ては其の解脱する事又極めて簡易迅速なるべきや必然である、嗚呼定力……何をか之れ定力と云ふ、曰く一箇の精神的作用を以て全力を体内に用ゆるもの即ち之れ……尙之を釋言せんか、普通力と稱するものは、手足をかりて外部に發動するものなりと雖も、定力は否らず、即ち全身の内部に對つて、徹上徹下、些の遲緩をも殘すことなく、擧げて之が傾注を盡すものなりである、故に其の最初に於ては或は困難の

事なりしあるべしと雖も、而かも行信座臥、庸に工夫を怠らすんば、何時しか妙境には達し得るのである。

達磨曰く『不立文字教外別傳直指人心見性成佛』と記せよ、簡はこれ、前陳の定力よりて、遂に心王宮裡に至りしものなる事を………定力なるかきにあらずして何をやでないか………

結 論

前陳の如く脳髓は、所謂覺不覺和合識の根本あれば、夫の耳根より此部に勇猛なる定力を通ずるに於ては、直下に其源頭を遮斷し且脊髓より昇流する陀那の流注をも自在に反流せしめ得ることが出来る、故に脳髓より全身に普及する流注粘液の停滯を解脱し真如圓相の本心に親灸せんには、又必ずや此の耳根より定力を用ゆるに如くものなしとは既に讀者の了知せられし處あるべきも尙且之が概言をなさんか、陀那粘液の停滯は喻へば水の寒氣に氷結せるも一朝陽春

暄和の候に會はんか、自然に融解又元の水たること一旦凝りし無明煩惱の堅氷は茲よ老病死の業果を現し來ると雖も、而も定力一度妙耳の門頭より圓通し、流注反流の曉には、堅氷忽ち融解して身心脱落の妙証を得るが故に膽氣日頃に百倍し、劍光失石の間に立も泰然自若我關せざるもの、如く、又一切の感病を根絶するを以て無病健全常住の佛身に復するや決して疑を存すべきものではある。

今や泰西の文物宇内に普及し、物理の深奥を究め、知識の精微を悉すと雖も、而も人生最大の希望たる、心身感病の根源を斷絶し以て救世安民の大事に至つては語つて已み詳かならず、況や之が實証おやであつた、然るに師の此說一度出で、無明長夜の眠は覺めぬ、讀者諸氏請ふ須らく實考証得して、茲に一切の感病を斷絶し悠々六塵の外に超脱し以て長へに無病健全の大安樂を享受せられんみとをである、………

疾病根治 觀音耳根圓通法 終

明治四十一年十二月廿四日印刷
明治四十一年十二月廿八日發行

(定價金四拾錢)



發行者兼
著作者

井出靜海

長野縣南佐久郡野澤町
二百四十五番地

印刷者

中澤萬助

長野縣南佐久郡野澤町
百五十七番地

印刷所

野澤活版所

長野縣南佐久郡野澤町
百五十七番地

長野縣南佐久郡野澤町二百四十五番地

發行所

大日本豫言學館

從二位侯爵久我通久 題字
代議士立川雲平 序
帝國農家一致協會中村和二郎 跋
井山靜海 著

陰陽 豫言 秘録

全壹冊 樹久
本代價金貳
圓郵税金拾
貳錢

本書は、陰陽五行、干支生克の原理と、人半日用の吉凶禍福鑑定法に至るまで詳細徹底に説述せる珍書にして彼の何れも術會何の教正或は何れも如何の大學生など自稱する諸氏の著書とは全く其撰を異にし實に斯道界に於ける唯一無二の金科玉條たり今其の内容の一略を記述せんが

- 五元の神（予が信ずる）●太極●陰陽●奇偶●男女●五行●視●聽●嗅●味●觸●平人の脈呼吸と脈の五動●相生●天照大神の豫言●我國と易卦地山謙●相對●チツミ除ケ●半可通の易と具原益軒翁●線路●日露戦争の實例數項●死生順逆變化出沒の原理●三輪●運氣の起因●在胎日數●妊娠法●觀世音菩薩の利益●四柱推命家の忠説●心●骨相說●十二原性●子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥●十機原性●甲乙丙丁戊己庚辛壬癸●遺業●病源●治療法●調息法●至誠感通●大國主神●少彦名神●樂物的治療と心理的治療●天理教●應用法●天賦運命鑑定法●吉凶成敗鑑定法●三輪と六親配當法●十二運判斷法●宿曜經●附録●九星運獲の原理●前人未發の説等其他百餘十項

大日本豫言學館

明道新報

毎月廿回十五日發行
壹部郵税共金拾錢
昭和二年十二月郵税共金壹圓
●本館は豫言術の神妙しし併せて神學佛三道の精蘊なり

館員及鑑定

●陰陽豫言術本領

宇宙に於ける各種現象の運轉は對
一語中に埋没し絶て之を怪むべきが如き持民の心也。運轉の
と雖も一度真理の存在を知りしは如何に其の心も運轉の
の苦辛慘憺を要する所以なりとす。能長深し此處に見む。取を
萬巻の書物に思ひ想を宇宙の浩漠に放ち以て運轉の雲霧を排
し。眞理の道体は爾後むたう是に於てか上は國家の興衰隆
替より下は各人の吉凶禍福に至る迄。運轉の雲霧を排す。如
し。是本術の本領にして而が世の地を以て形を辨き。風を捕ま
る。的幾多の卦占者流と其理を異にする所以なりとす。若夫其真
を知らしむ。欲せば請ふ。一度來て觀し。く之が實験をなす。

●通信教授

斯術の眞理を研究して人事百般の吉凶悔吝
を告知せんと欲する。士は入館料金を圓教
書代金貳圓相添ひ申込。し本館は直に館員名簿に登錄し。館員
並に其に豫言秘訣豫言精義の二部を送呈し。留書中不可解の點
は質問に應ず。

●天賦運命鑑定

は宿命學の眞理に體成し以て其人
天賦の運命天賦適業性情病癩素
病幸福の方法を示す。鑑定料金を五拾錢。特別金を壹圓。本人の生年月
日を要す。

●吉凶成敗鑑定

は陰陽學の眞理を應用して其人
行の可否を決し且世の大方針を
指示する。その由ち結婚男女の相性養子養女目的の達否事業の
盛衰開業及轉業其他何事を限らず。且人事百般の吉凶禍福を
豫言し。併せて其凶を吉に轉せしむるの方法を指示す。
●鑑定料金を五拾錢。特別金を壹圓。本人の年齢及職業を要す。

●相場高低鑑定

は米株式生糸商品其他何品に限
らず。各人希望の物品の相場を高低
を明瞭にする。のなり。●鑑定料金を五拾錢。特別金を五圓。

●開運選日表

は其人の運命の吉日を導出せしむるの
由るその也。●鑑定料金を五拾錢。特別金を五圓。本人の生年月日を要す。

●方位吉凶表

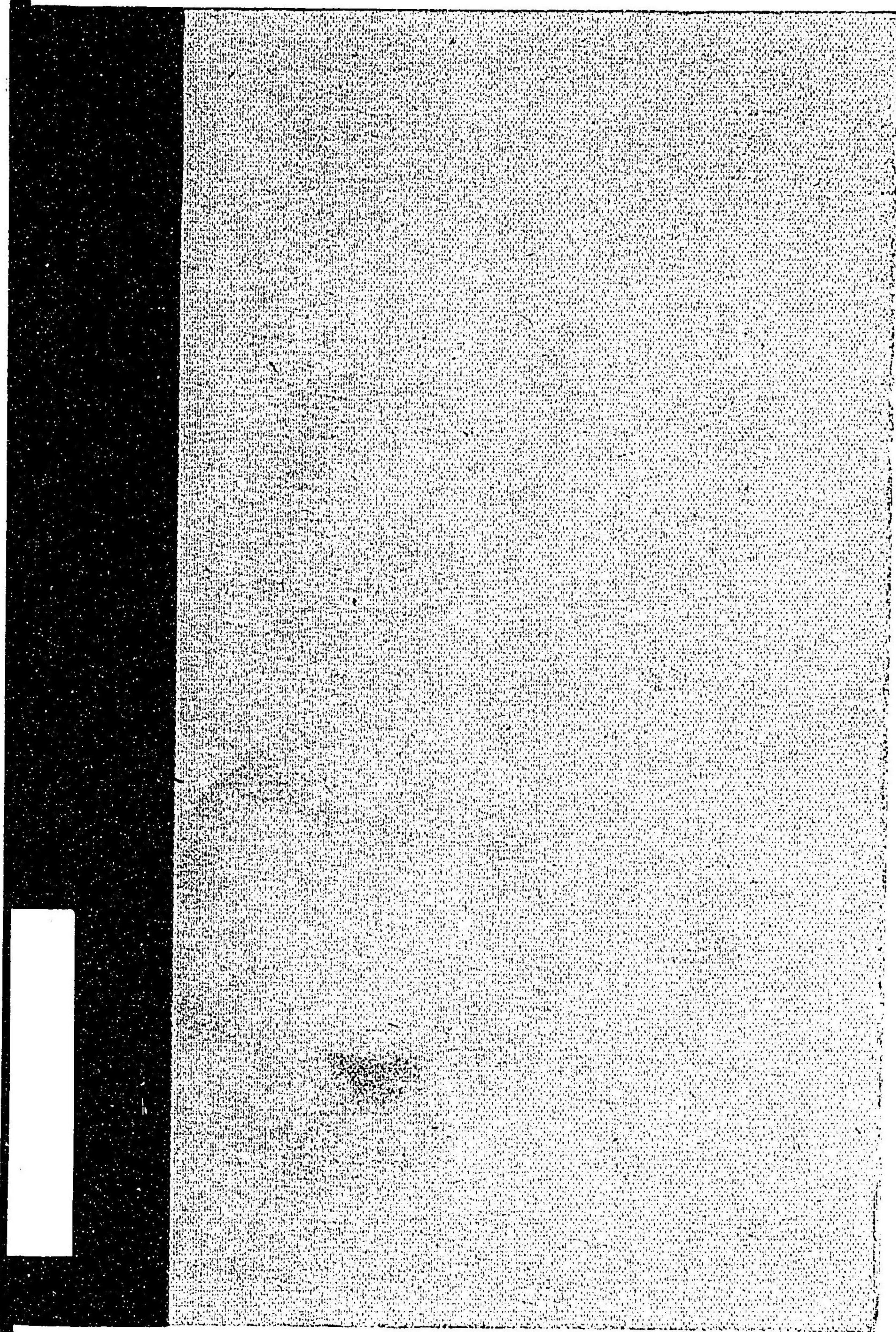
は其人の運命の吉日を導出せしむるの
由るその也。●鑑定料金を五拾錢。特別金を五圓。本人の生年月日を要す。

大日本豫言學館

(明治三十年創立)

長野縣南佐久郡野澤町

電話二〇九



[A small, white rectangular label is positioned at the bottom of the black vertical strip, but it contains no legible text.]